

教区だより

2022

1月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第382号

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしてきたことが当たり前ではなくなった現実^に直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このよくな時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身ををさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思えます。



すべての人に その人を生み出した 歴史と背景がある

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

目次

- 1頁 「ことば」
- 2頁  悲しみが通じあう時 一愚禿悲歎述懐を通して—
《第9回》 よつつし 四衢 あきら 亮氏
- 3頁 「今、この時に、親鸞聖人に会う」 おくら 小倉 ともこ 朋子氏
- 4頁 「教区教化推進本部 育成研修部会」
- 5頁 「教区教化推進本部 共同教化部会」
- 6頁 教務所からのお知らせ



出版部会

すぎもと 杉本

ともうみ 智海



かなしきかなや道俗の

良時吉日きよときえらばしめ

天神地祇てんじんじぎをあがめつつ

ト占祭祀ぼくせんさいしつとめとす (聖典五〇九頁)

先の和讃で「五濁増のしるしには」とありました。劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の五つの濁りの世の姿として、当時の仏教界の姿が取り上げられ問題にされた内容が、この和讃から始まります。

「良時吉日をえらび、ト占祭祀をつとめる」あり方について親鸞聖人は、「異学別解のひと」と言われます。まず、

異学いがくというは、聖道外道しょうどうげいどうにおもむきて、余行よぎょうを

修しゆし、余よ仏ぶつを念ねんず、吉日良辰きよちちりょうしんをえらび、占相祭せんそうさい祀しをこのむものなり。これは外道げいどうなり。これらはひとえに自力じりきをたのむものなり。別解べつげは、念ねん仏ぶつをしながら、他力をたのまぬなり。別べつというは、ひとつなることをふたつにわかちなすことばなり。解げは、さとりという、とくということばなり。念ねん仏ぶつをしながら自力じりきにさとりなすなり。かるがゆえに、別解べつげというなり。

(聖典五四一頁)

また私たち自身の身の在り方を、「さるべき業縁のよもおせば、いかなるふるまいもすべし」。私たちのふるまいは、これまで積み重なった様々な内縁(原因)と外縁が関わり合つて依りおこる、その内縁と外縁全体が私自身であるのだと親鸞聖人は語られ、私たちは業縁存在だと言われるのです。

しかし私たちの意識は、「まず私が在って」、その外に様々な縁があるのだと考えます。一つなのに、私と縁を二つに分けて「さとりなす(考え理解する)」のです。それで、自分の外からやって来る「縁」によつて自分の行為やあり様が左右されると考えることとなります。そして自分にとってより良い行為や出来事になる縁は「良い縁」、自分にとって都合の悪い結果をもたらす縁は「悪い縁」と、ここでも「縁」を二つにわかつのです。

そして良い縁を集め、悪い縁を避けるために、い

つごろどちらから悪い縁がやって来るのか予知したくて、占いを頼ることになります。良時吉日をえらぶのはそのためです。

また悪い縁である禍を祓い、良い縁を集め福とするために、祭祀に熱中することになります。そうして禍を無くして、福を集め自分の希望を実現しようとするのです。その在り方は、自分に思わぬ不幸になった時は、どんな悪い縁がどうして私に訪れたかを占うなど、自分の外に吉凶禍福を操るものがあると求めることにもなります。

そして吉凶禍福を気にして、恐れや不安を持たずにはいられない人間の弱みに付け込んで、祭祀や占いによつてそれを操るようふるまい、そんなことでは禍が訪れますと脅すようなことを教えとすることが天神地祇の霊信仰です。それを魔界外道と批判された親鸞聖人は、その姿を当時の聖道諸宗に見られたのです。

業縁存在として自身の事実の目覚めに人を立たせる仏教を、ト占祭祀に隷属させてしまうものへと変質させる人間の欺瞞性を厳しく知らされると同時に、それを決して見逃さず、しかも見捨てることなく目覚めに寄り添う真宗仏教の確かさをいただいて、「かなしきかなや」と詠われます。

「今、この時に、親鸞聖人に遇つ」



「私の学び直し」

九州教区豊前中津組正明寺 小倉 朋子

ここ三年ほど原始仏教に関して学ぶ勉強会のお世話をしています。原始仏教とは釈尊在世時から大乘仏教成立までの仏教のことで、初期仏教や根本仏教ともいいます。会では日本語訳された仏典をテキストに学んでいます。講師は仏教学の教授として教壇に立つておられた先生にお願いし、オンライン化が進んだ昨今においては全国各地の朋友と共に学ぶことができるようになりました。お寺を留守にしないくい身としてはオンライン化の恩恵を存分に享受し、空間を超えて多くの人と学びができることに

喜びを感じています。

私は学生の頃から「歴史」という学問の学び方がよくわかっていなかったように思います。端的に言う興味を持ってなかったのです。それはなぜだったのかという理由が最近わかるような気がします。この原始仏教を学ぶ会で以前から取り組んでいた釈尊の生涯についての学びの中では、自分の今までの歴史の学び方が変わるような感覚がありました。

会では仏典に書かれている対話などの言葉にたずねながら生涯を辿っていきました。例えば釈尊晩年に釈迦族が滅亡してしまふということが起きますが、その学びの中で釈尊が王子の頃を過ごしたカピラヴァツツの政治的立場をあらためて知り、完全な独立国ではなく強国コーサラの脅威にさらされていたのではないかという当時の状況を、仏典の一節から解説いただきました。釈尊はその時に何を思われたのだろう、釈迦族を滅ぼした方はどうなったのだろう、釈迦族は本当に滅亡してしまったのだろうかとか色々な疑問が湧いてきます。そのように興味を持つことができたという経験から振り返ると、今までの学びは年表のような平面的な理解に過ぎなかったのかもしれないと感じました。さらには、二五〇〇年もあるか昔の話が教えと共に現代まで伝わっていることの不思議さと、どのような思いで先達は伝えてきてくださったのだろうか、私はこの事

をどのように受け取り伝えていけるか、ということろを考えることこそが、今、自分が学ぶ意味のよう

に思います。
歴史や釈尊のご生涯を学ぶことの大切さにあらためてふれたことで、親鸞聖人のご生涯についてもこれを契機にあらためてあい直したいという思いが湧いてきました。読み返した同朋の会テキスト『宗祖親鸞聖人』の冒頭には、

「得道の人」との出会いをぬぎにすれば、真宗の教えは、わたしたちの身につかない

とありました。得道の人とは本願念仏の教えの真実である事を実証していられる人のことです。歴史上の人物という事ではなく、様々な苦悩に向き合われ教えを深く受け止めていかれた親鸞聖人との違いがすでに強く望まれていたのです。今までも色々な先生に「ご生涯に学ぶことの大切さ」を聞いてきたはずですが、私は通り過ぎてしまっているようです。戻ってまたたずねなおすようで情けなく恥ずかしいですが、今の自分だからこそであうことができま

ったところでは、気持ち新たに私の学び直しが始まったところでは、



育成研修部会とは

主査 平原 晃宗

育成研修部会は、僧侶育成における研修の場を企画、検討し開催していく部会です。僧侶を育成するのはどこまでも如来の教法になりませんが、その教法に出あつていく場を提供し、その学びの中で仲間と出あつていくことを願っています。育成研修部会では、この一年間

主な四つの事業内容を見直しました。
一つ目は、教師を対象とした教学の研鑽と伝道の在り方を研修する「伝道研修会」です。昨年は新型コロナウイルス感染症拡大のため実施ができませんでした。今後開催するにあたりZOOM開催の案も出しましたが、広域にわたる教区の中で教区人が直接出あい、共に学ぶことを重視して、一日のプログラムで対面開催にすることにしました。コロナ対策を行った上で、引き続き大阪教区の山口知丈先生をお招きして実施する予定です。

講については、広域教区のため遠方からも幅広い参加ができるようにZOOMでの参加を教区内外で募集します。教学の学びは専修学院院长の狐野秀存先生、声明作法の学びは本願部堂衆の松村大栄先生にご指導いただく予定です。

三つ目は、教師試験検定に向け準備学習を行う「教師試験検定準備学習会」です。昨年はコロナ感染症拡大の時期であったため急遽中止となりました。しかし、この時にいただいた教区内外からの要望を中心に様々な見直しを行いました。その結果、これまでは一週間の夏期開催のみでしたが、今年度からはZOOM開催を併用した春期の短期学習会も予定しています。

四つ目は、得度希望者を対象に、僧侶としての基本行儀を習う「得度学習会」です。昨年三月に実施しましたが、育成員等研修小委員会を中心とした運営を改め、青少年研修小委員会の協力や教区内の講師を招き、得度の意義と声明作法の学びを深めました。

育成研修部会では、この事業以外にも各地区の聖典学習会への助成なども行い、熱の入った僧侶研鑽の場ができることを実現していきます。

育成研修部会

主査 平原 晃宗

副主査 山本 滋

部員 渡邊ひろみ

浅井 渉

中村 修司

野田 彬雄

比叡谷紗誓

中島 正泰

教区教化推進本部

部会紹介

今月より、教区教化推進本部に置かれる五つの部会を紹介していきます。

「教区教化は教区人の手で」という言葉で伝統されてきた願いを具現化していくため、昨年、あらためて教化推進本部が設置され、教区教化

2月発行号は青少幼年教化部会と男女共同参画部会の紹介になります。



共同教化部会

主査

藤川 秀行ふじがわ ひでゆき **ア**

副主査

河野 恵嗣こうの けいじ **イ**

部員

東 美恵子あずま みえこ **ウ**

黄揚川 淳つげがわ あつし **エ**

保木 円もつぎ まどか **オ**

赤松 崇磨あかまつ たかまろ **カ**

治田 裕臣はるた ひろおみ **キ**

藤枝 良太ふじえ りょうた **ク**

を担うそれぞれの「部会」が誕生しました。「教化の場としての教区」に向けて、各部会の課題や取り組みの方向性、そして、発足にあたっての意気込みを、主査より紹介いただきます。まずは、育成研修部会と共同教化部会です。

教区教化は何のためにあるのか

主査 藤川 秀行

教区教化は何のためにあるのか？

これは一年間の見直し期間中、私自身に繰り返し問い返されてきたテーマでした。これまで様々な事業が、おかれた状況に応じた形で、その時代の分において事業化されてきました。もとより教化に形はなく、正解があるものではありません。これまでに教区教化の歩みは、そこに関わる方々の議論と工夫の積み重ねであることは言うまでもありません。

この度、私たちは共同教化部会としての新たな歩みをスタートしました。二年間の任期の中における私たちの中心事業は「議論」することにあります。

これまで私は何をもって教化としてきたのか。教化ということをつかっていたこと、どこか自明のことにしてきたのではないのか。

この部会の出発点はここにありません。私にとって教化とは何か？そのことを抜きにして、教

区教化や共同教化は語りえませんが、だからこそ、丁寧な議論をし、その内容を教区の皆様にお伝えしていこうと考えています。

私自身、これまで教区にお育ていただいたという自負があります。教区という組織があったからこそ、様々な出会いがあり、新たな気付きがありました。しかし同時に、組織というのは、絶対化すると危ういものでもあり、組織を維持するための教化事業なら本末転倒でしょう。

そこで当部会は、積極的に地区や組に出向き、それぞれの現状を聞かせていただき、互いに共有し、それぞれが必要とされるサポート体制をとっていきたくと考えています。その足掛かりとして、今年の三月十日〜十一日、同朋会館を会場に組長・組門徒会長研修会を開催する予定です。

教化事業の膠着化、起こってくる目詰まりをしっかりと課題化し、丁寧に議論を重ね、状況に応じた工夫をしていく。そのことで、人・財・場が柔軟に循環していく教化を、共同教化部会は目指していきます。

教務所からのお知らせ

《敬弔》

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第一組 玄福寺前住職 甲良 幸雄
二〇二二年八月十日 九十二歳

近江第七組 西敬寺住職 山本 清麿
二〇二二年十一月五日 八十六歳

〔敬称略〕

《京都教区得度学習会について》

左記の通り、開催いたします。

期 間 二〇二二年三月二十九日・三十日

※三千日午後より得度審査を行います。

講 師 教区内講師

本山本願部堂衆

対象者 二〇二二年五月以降に得度式の受式を予定されている方。

申込み 三月十一日(金)までに、参加申込書を京都教務所に提出ください。

※詳細は、同封いたしました開催案内を

参照ください。

《當慶会館報員講報告》

二〇二二年十二月二十一日(日) 京都教区会館(當慶会館)にて「當慶会館報員講」が、新型コロナウイルス感染症拡大防止対応のため、内勤めにてつとまりました。丹波第組の皆さんより、当日のお斎(持ち帰り)として、お赤飯・お酒・お菓子を提供いただきました。ありがとうございました。また、なお、墨林浩氏よりいただきました法話につきまして、京都教区ホームページより動画配信いたしておりますので、視聴ください。

《年末・年始の事務休暇について》

年末・年始事務休暇として、左記の間は教務所事務の取り扱いを休止します。緊急(期間中の授与物のお渡しや院号法名の申請、収骨の受付等は緊急に含みません)の場合は、左記緊急連絡先までご連絡いただきますようお願いいたします。

〔事務休暇の期間〕

二〇二二年十二月二十八日(火)より
二〇二三年 一月 五日(水)まで

〔緊急連絡先(教務所携帯電話)〕

〇九〇一三七一九一七九八一

イマダカラ

昨年、祖母が往生した。

祖父母の中の最後の一人で、できる限り健康で長生きしてほしいと思っていた。その通り九十二年の人生だった。宝塚で一人暮らしをしていたが明るい性格で友人も多く、楽しそうに暮らしていた。年頭に体調を崩し、搬送された宝塚市民病院で検査を受けた。

検査の合間に「お腹が空いた」と呟き、付き添っていた伯父は「食欲があるなら大事には至らなさそうだ」と一旦は胸を撫で下ろしたそうである。ならば食事を摂ろうと病院の食堂に行き、メニューに練(にしん)蕎麦があるのを見て「温かいものが食べたいのでこれにする」と注文をした。ふた口ほど食べると「もう入らない」と言い、その後入院となった。コロナ禍のため孫の私らも面会ができず、年齢のこともあり、おそらくは逝去の連絡を待つだけという状態になり三月にこの世を去った。死亡後、病院の支払いに赴いた伯父は思い出に病院の食堂で祖母の生涯最後の食事となった練蕎麦を注文した。

伯父は、母が最後に食べたものと思い、胸にこみ上げてくるものを抑えられず目頭が熱くなったそうである。特に何の変哲もない練蕎麦ではあるが、その思いを持って味わった練蕎麦は特別なものである。

明法房(『御伝鈔』に登場する山伏弁円。聖人の御弟子となり、明法房と名を改めた。)の歌「山も山道も昔にかわらねど、かわりはてたる我が心かな」が思い出された。何かにつけて「嬉しい!」が口癖の祖母だった。私自身も嬉しさに溢れた歩みをしたいと、ありし日の祖母の姿を思う。

(出版部会 杉本 智海)

編集後記 the editor's note

お寺に身を置く者として、お寺は、人が安心できる「場」であることが求められていると感じています。二年前より月に一度、同朋の会を開いています。勤行に始まり、「正信偈」についてのお話、そして参加した方々でお菓子を食べながら、いろいろなお話をするというか塗の流れです。直近の会の時、参加者のお一人が「安心する場というのは大切ですね」と言われました。精神的な悩みを抱えている人をどう支援するか、という場面でした。悩みに答えることも重要ですが、心が落ち着く場所であれば、まず、自然と悩みを打ち明けられるのではないのでしょうか。そういった役割を果たせる場所、心の休憩場が、わたしの理想のお寺です。

(出版部会 井上 至)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第382号

発行人 日野 隆文(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075(351)5260 Fax : 075(351)5256

発行日 2022(令和4)年1月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

